

「全国唯研ニュースレター」125号（2016年4月6日）

<新刊著書短評>

『多元的共生社会が未来を開く』 尾関周二著

（農林統計出版、2015年10月、2,000円＋税）

「共生」という概念が日本独特のものであり、その意味を忠実に表現する外国語の単語が存在しないことはよく知られている。尾関氏は、むしろそのような「共生」概念の独自性を生かし、この用語に人間-自然、人間-人間の双方の関係性において、支配-隷属や一方的な利用・操作・搾取を許さないような未来におけるあるべき姿を示すキーワードとしての意味を与えようとする。

狩猟採取社会から農業社会への移行において、またさらには科学技術の発展を基礎とする工業社会への移行において、人間は自然への埋没から抜け出て自然と距離を置き、対象としての自然を意識的に利用し、操作するようになると同時に、労働を組織し所有権を確立し商品交換を促進するために、国家権力や市場・資本蓄積を強化・拡大し、人間の人間に対する支配や搾取を押し進めてきた。このような過程が、他方で人間の自然的制約からの解放、人類の真の平等を求める偉大な宗教・哲学思想の登場、市民的自由の獲得等の積極的側面を伴ってきたことは確かであるが、福島原発の事故やグローバル化した資本主義の下での新自由主義的搾取の深化を見るとき、人間-自然、人間-人間間の関係を抜本的に改革することが求められているのもまた明らかである。

尾関氏は、このような改革実現のために、小規模な自立的社会システムとそのネットワーク化の上に立つ「<農>を基礎とした農工共生社会」の構想を展開し、「共生」を理念とする新たな連帯の形を提起している。本書はこれまでの尾関氏の仕事を壮大な人類史的展望の下に総括した一般向けの著作となっており、広く読まれ、議論されるべきものである。